

ハヤテのごとく!
合同小説本



14
〜
〜

vol.4

目次

(著者名は敬称略)

表紙イラスト…ピーすけ

本文挿絵…大和撫子、双剣士

はよりがい

著者…ロッキー・ラックーン

2

勇気を出して

著者…kull

13

く生命の弦く

著者…torbion

22

A fortunate form

著者…みつちよ

24

マリアさんがお母さん役なら
ハヤテは何役なんだ？

著者…羊田ペンタ

39

公開サイト…ひなゆめファンの止まり木

<http://soukenshi.net/perch/>

著者あとがき & メッセージ

53

編集後記

58

クイズ企画の趣旨説明と結果ページ

<http://soukenshi.net/perch/sp/quiz04/>

奥付

58

ごきげんよう、天王州アテネでございます。いきなりですが、ここ最近（正しくは数年）、私の出番が完全に無くなって、表紙裏でハヤテに愚痴をこぼす位しかしておりません。私が好きだという聡明で正しい心を持つ読者の皆様のために、今回は特別に「神様の真似事キット」を使つて、小さくなってしまった私——アリスの一日を追うという企画をお届けしますわ。

はよりがい

著者：ロッキー・ラックーン

※ AM7:00 ※

「おはようアリス！もう7時よー！」

「うーん、あと4時間ですわ…」

おはようございます、今日もいい天気ですわね。小さくなった私の朝は早いようです。相部屋の桂さんに起こされて…と言つてもダダをこねているようですが。

「んもう、毎朝7時に起こしてって言ったのはアリスで

しょう!？」

「…あと5時間…グースカビー」

「はあくあ…今日もダメ。これで今月は全滅…もう知らないからね！じゃあね、行ってきます！」

今月は全滅って、一ヶ月もあれば一日くらい起きられる日があつても良いのでは!?!桂さんもほとんど毎日起きないのに起こしてくれるだなんてお人好しですわねえ。

「ZZZ…もう食べられませんわよ…」

なんとまあベタな寝言を漏らすのやら…。先が思いやられますわね。

※ AM11:45 ※

「ふあくあ、今日も心地の良い朝ですわね」

結局この時間での起床ですか…。もう朝だなんて言えない時間ですわよ。

「お、ちっこいの！今起きたのか？今日は私の勝ちのようだな。私は11時半には起きたぞ！フーン」

「あら、ナギさん。おはようございます」

大きなあくびをするアリスに声をかけるは、三千院ナギさん。このアパートの大家さんですわ。この人も白皇学院の生徒のはずなのに、平日の昼間からいつも家にいるのは何故なのかしら？

「その『ちっこいの』という呼び方、やめて頂けませんこと？私には『アリス』という名前があります。淑女レディーに対して失礼ですわ」

「11時半過ぎても起きて来ないレディーがどこにいるんだよ？…まあ、お前には色々世話になってるし、どうしてもと言うのなら聞いてやらんでもないぞ」

カチーン

ん？なんの音でしょうか？

「何が『聞いてやらんでもない』ですか！？貴女だって、同世代の人と比べたらちっこいでしょう？それを子供の私がいる事で調子に乗って…そーゆー所が器がちっこいんですわよ！」

「なんだと！人が下手に出てやれば調子に乗りやがって！！」

…「カチーン」って、堪忍袋の緒が切れた音ですか。こんなものまで分かるだなんて、ずいぶんと便利な「神様の真似事キツト」ですわね。確かに「ちっこいの」と呼ばれるのは心外ですから、分からなくもないですが。

「あれで下手に出てるつもりなんですか？それであればもう少し言葉遣いのお勉強をした方が良いでしょうね。今、貴女と同世代の人たちは毎日学校に行って世の中を学んでいます。それにひきかえ、いつまでも引きこもって自分の周りに迷惑ばかりかけてる貴女のどこがちっこくないと言うのですか？」

「ぐぬぬ、こうなったら…うわーんマリアー！ドS姫が今日も私をいじめるうー！！」

泣きながら逃げて行くナギさん。6歳児相手にこの図はちよつといかがなものでしょう。

「他愛も無い…これで25連勝ですわね」

仮にも居候先の大家さん相手だというのに、一刀両断ですわね。ケンカするほど仲が良いとは言いますが、コレはケンカなのでしょいか？まあ、25回も言い合ってるくらいなら大丈夫でしょうかね…。

※ PM0:00 ※

「いただきます」

今日のお昼ご飯（起きたばかりのアリスには朝食ですが）は焼きカレー。昨晚のカレーをご飯の上にかけて、その上にチーズをふりかけてオーブンで焼いたものです。美味しそうですわね…。

「ナギ、午後からは学校に行つて下さいね？」

「こんな時間から行ったところで、すぐに終礼じゃないか！中途半端な事は良くないのだぞ！」

「はあ…やれやれですわね」

アパートに残るはアリスとナギさんとナギさんのメイドのマリアさん。毎日こんな会話を繰り返しているので

しようか…。理事長として少し考えないといけないかもしれませぬね。

※ PM1:00 ※

「Zzz…グーで叩いて…差し上げますわ…私はあります！」

お昼寝ですか、よく寝てますわね。まださつき起きてから1時間ほどしか経ってませんが…。(※ちなみに昼寝からの起床は3時半の模様)

※ PM4:00 ※

「はあく…またヒナギクさんに嫌われてしまった…」

「あら、そんなのいつもの事なのに…気にしていたのですか？」

「アーたん、それはちよつと傷つくなあ」

今度はハヤテの部屋です。私個人的には、一番楽しみ

な所ですわよ。

「それで、今日は何をしでかしたのでしょう？」

「それが…かくかくしかじか…」

「なるほど、それはいけませんわね。男性というのは、強く在り、優しく在り、甲斐性を持つていなくてはなりませんわ。ハヤテには乙女心への優しさが足りていないですわね」

この娘、私の記憶が無いのに…この座右の銘はしっかり身に付いているのですね。感心ですわ。ハヤテも覚えてくれているかしら…？

「いやあ…アーたん記憶を無くしても、言ってる事はあの頃と変わらないね」

「ハヤテ…」

優しい顔でアリスの頭を撫でるハヤテ。私との思い出、まだ覚えててくれてるんですね。やっぱり、私はこの人の事が…

カチーン
なくて？

…え？ここでこの音はおかしいのでは
「なに話を逸らしてるのです？天王州アテネの事は分からないと、いつも言ってるでしょう。ヒナと上手くやる気が無いのなら私は部屋に戻りますわよ？」

この娘。恐ろしい程に容赦無いですわ…。

「ご、ごめんアーたん！僕が不真面目だったよ」

「まったく。貴方は人からの物の教わり方というのを知らないようですから、ビシビシいきますわよ？マリアさん、ハリセンか竹刀を持ってきてくださいな！」

「はいはくい♪咲夜さんとヒナギクさんから借りて持って来ましたわよ」

記憶が無いから仕方が無いのかもしれませんが、ハヤテに恋をしている様子はありませんわね。自分相手とはいえ…その点はちよつと安心ですわ。

※ PM7:00 ※

「いただきまーす！」

夕食はハヤテお手製のから揚げです。うーん、いい匂いですわ。って、匂いまで届けてくれるだなんてつくづく便利なキットですわね。

※ PM8:00 ※

「アリス先生、入ってもいいかな？」

「はい、どうぞー」

夜はアリスのお部屋（桂さんの部屋の押入れ）に訪問者ですわ。同じアパートの西沢さん。狭いスペースで体育座り。これまたおかしな絵面ですわね。

「して、今日のご相談はなんでございましょう？」

「フッフ、私の相談はズバリ『どうすれば痩せられるか？』だよ！」

「歩さんは痩せたいんですか？」

「そう！あと3キロ痩せられれば、ハヤテ君に対してナギちゃんともヒナさんとも対等に渡り合えるんじゃないかな？」

この西沢さんという人は、ハヤテの事が好きなのでね。自信満々に胸を張る姿に、アリスもちよっと呆れ顔です。

「…なぜ、そう思うのですか？」

「最近、3キロ太っちゃって。このままじゃマズイかなあ〜って思ってた…」

「はあ…」

面倒くさそうに頬をかくアリス。さて、この難題をどうやって切り抜けるのかしら？

「この際、痩せたい動機とその根拠が意味不明なのは置いておきましょう。歩さんはハヤテの好きなものはご存知ですか？」

「ん？バイオリンが好きっていうのは知ってるけど…他にあるのかな？」

「ズバリ、女性の胸…そう、『おっぱい』ですわ！」

人差し指でビシッと西沢さんの胸を指すアリス。いきなり何を言い出すのですかこの娘は!?

「ええ〜っ!?おっ?ど、どーゆー事なのかな?」

「どーもこーもありませんわ。そのままの意味です。ハヤテはいっただって女性の胸ばかり見ていますわよ。なので、増えてしまった3キロを無くすのではなく、胸に活かす事に集中した方が効率的だと思いますわ。そもそもヒナやナギさんと対等になった所で、貴女自身がハヤテに好かれたいと意味が無いでしょう?」

「た、確かに:」

確かに私を助けてくれた時(原作24巻参照)だって、他に言う事があっても良かった所で真っ先に胸の話をしてましたわ。:という事は、ハヤテは私以外の女性の胸ばかり見て暮らしているって事なんですわよね!許せませんわよー!アリスもアリスで、なんでそれを知っててそのまま放置なのですかー!(※記憶が無いからです)

「:となれば、バストアップのための取り組みですわね。食生活の改善に運動、いろいろやってみてはいかががでし

よう?そのあたりはヒナが物凄く詳しいので、聞いてみると良いかと思えます」

「ハイ、分かりました!いつもいつもアリス先生のご意見には驚かされるばかりです。ありがとうございます!帰りにヒナさんとこ寄ってこ〜!」

「悩める子羊に幸あれ」

私の怒りも収まらぬうちに相談終了。西沢さんは帰ってしまいました。ところで桂さんからバストアップのアドバイスだなんて、赤点の生徒に勉強を教えてもらいに行くようなものじゃないのですかねえ。(※怒ってるせいで当て付け気味のアテネさん)

「次の方どうぞ」

「よろしくお願いします、アリスさん」

次の訪問者はメイドのマリアさん。この人も子供に相談したい事があるのですか。難儀な事ですわね。

「マリアさんのご相談とはなんででしょう?」

「はい、ナギの事なのですが:。ハヤテ君や千桜さんとか:ナギと出会って間もない人たちがあの子の考えを変

えたり、成長させているのを見て、あの子にとっての私の存在意義が分からなくなっていると言うか…」

…6歳児に話すには少々重過ぎる内容ではないでしょうか？

「マリアさんはナギさんの『お母さん役』であり続けたい、という事でしょうか？」

「端的に言えば、そうですね。なんだかんだ言っても、あの子は私にとって大事な家族だと思っっていますので：手がかからなくなる事自体は嬉しいのですが、私の事をちゃんと見てくれているのかと不安になる時が最近よくあるんです」

「うーん、そうですねえ…」

両の手の人差し指で頭をこねるアリス。この人様の人生に多大な影響を及ぼしそうなお題にどう答えるか、私自身も興味深々になってしまいます。

「結論から言えば、マリアさんが変わる必要は無いと思いますわ」

「無いんですか!？」

「ええそうですね。考えても見てください。あの年代、つまり思春期の人格を形成する人間関係というのは友人であったり、気になる異性であったり、憧れの存在であったりと、なかなか親が絡んでくる場面は少ない傾向にあると思いますの」

「確かにそうですね…」

「ですから、マリアさんは彼女が道を踏み外さないように見守っているだけで良いのです。成長や変化に疲れたナギさんが休むための止まり木となる存在であつたらと良いのだと思いますわ」

「止まり木…ですか」

「はい、愛するがゆえに見守る愛というのもあると思いますわ。ですからナギさんの変化にいち早く気付いてあげて、道を示してあげられるように見守ってみてはいかがでしょうか？」

「見守る愛…分かりました！私、頑張ります。アリスさんのおかげで自信が湧いてきました。ありがとうございます！」

「フフフツ、それは良かったですわね。悩める子羊に幸あれ」

絶句…ですわ。この娘は一体どんな人生を送ってきた

のでしょうか、この私ですら疑問に感じてしまいます。
(※食べて寝て、起きてまた食べて寝るだけです)
それにしても、いい歳した若者たちが6歳児に人生相談をする絵はなかなか奇妙な光景ですわね。

※ PM9:00 ※

「はあ…またやつちやつた…」

「ん？」

寝る前のトイレから帰ってきたアリスを迎えたのは同室の桂さんの盛大なため息。多分、夕方にハヤテが相談してた件ですわね。

「そのため息、察するに『失言の件でハヤテに謝られたのに、散々喚き散らして素直に許してあげられなかった』という所かしら？」

「な、なんで分かるの…!？」

「色々大変ですわねえ、年頃の乙女も」

「うう…」

もっと大変なのは、6歳児の身でアパートの住人のメンタルケアを担ってる貴女の方ではなくて？

「まあメゲずに、もう一度ハヤテに会って言ってきたらいかがですか？」

「でも…出来ないよお…」

あまり付き合いは長くないですが、こんな弱気の桂さんは初めて見ましたわね。年頃の乙女…という事は、彼女もハヤテが好きという事でしょうか？ホント、罪作りの執事さんですわね。(だがそれがいいのですわ)

「ヒナ、『出来ない』という言葉を軽々しく使ってはダメですわよ。今の貴女は『出来ない』のではなく『やらなだけ』なのですわ」

「…えっ!？」

『出来ない』という言葉は、ちょっとこの部屋から出てドアをノックすればハヤテに会える貴女が使っても良い言葉ではないのです。ハヤテに想いを伝えたくても物理的に出来ない状況にいる人間もいるのですから…。よろしいですわね？」

うなだれる桂さんの頭をポンと叩くアリス。さすが、記憶が無くても私だけの事がありますわね。そう、本来であればこのページを余す所無く使ってハヤテと私のイチャコラ具合を表現してもらおう所なのですわよ！桂さんも勇気とやる気を出しなさい！それにしてもこのキット、料理の匂いとかの機能はいらぬからハヤテとおしやべり出来るようにしてくださいばいいのに。

「…うん、私が間違ってた。ゴメン」

「あら、私は別に謝って欲しくて言った訳ではありません。分かって貰えればそれでよろしいですわよ」

「うん。でも、ハヤテ君の前に立つと何を言えればいいか分からなくなっちゃうんだけど…どうしよう？」

「そうですねえ…あ！こーゆーのはいかがでしょう？」

「なにになに？」

それから二人はしばらく楽しそうにおしやべり。ハヤテとの事もなんとか上手くいったようです。なんだかんだで、アリスは桂さんにべったりなのですね。彼女が「ママ」で良かったですわね。

※ PM10:00 ※

「では、おやすみなさいヒナ」

「おやすみアリス。今日はありがとう」

「礼には及びませんわ。明日も7時に起こして下さいね」

「それはいいけど、起こすからにはちゃんと起きなさい？」

「出来たら考えておきますわ。では…」

これで就寝ですわね。一日彼女の事を追ってましたが、アパートの住人の皆さんに受け入れられてるようで安心しましたわ。ハヤテや桂さん以外の人たちともちゃんと仲良く…って、アレ？

アパートの住人は少なく見積もっても6人、いつもじやれて来る犬と飼い主の娘とそのお友達、白皇の生徒会の面々、ナギさんが常連のビデオ屋さんの若いご主人とメイドさんとも仲が良いですわね。それに、よくハヤテが連れていくラーメン屋のご主人ともよくお喋りを…

「ようやく気付きましたわね？」

…えっ？

「認めたくなさそうな様子なのでハッキリ言っただげますわ。『アリスは天王州アテネより友達が多い』のですわ」

この娘、私に話しかけているのですか!? 一体どうして? 神様の真似事キットは観察対象に気付かれずに見られるって説明書に載ってましたのに!

「どうやって私の声を…?」

「権威や財力なんか、それが無くなれば誰からも相手にされなくなりますわよ? もっとハヤテやマキナ以外の他人とのコミュニケーションを取るべきですわね。貴女は女神などではなく、ただの一人の人間なので。人間が一人ぼっちでは生きられないというのは身に染みていますでしょう?」

ぐぬぬぬ…言わせておけば好き勝手な事を抜かしやがりますわ。(※言い返せない)

「分かったら神様の真似事なんかしないで、さっさと元の姿に戻るための手助けをして欲しいものですわね」

この…いい加減にしないと怒りますわよ!!

「…ぐうすかぴい…zzz」

えっ?…すやすやと寝息を立てて眠っていますわね。まさか、寝言? 本当に寝言なのですか? 恐ろしい娘ですわ…。

…元に戻ったら桂さんに「アーたん」って呼ぶのを許可して…したら友達になってくれるかしら? べっ、別に私は友達が少ないなどという事は断じて無くて、それを気にしてるなんて事もありえせんわよっ!?

とりあえず5期ですわ! アニメ5期で私と友達をたくさん出して証明してあげますわ!! 5期決定のニュースを皆様楽しみにお待ちくださいね!

【おわり】

勇気を出して

著者：kull

「なあなあハルさん、お願いがあんねん」

週末。

いつものように愛沢家でメイドの仕事をしていると、咲夜さんがそう話しかけてきた。

「はい、何でしょう？」

私は掃除していた手を止め咲夜さんへ振り向く。

「ハルさんが前に勤めてたメイド喫茶あるやろ？明日だけそっちに出てほしいねん。」

「え、明日ですか？えっと・・・」

（秋葉みたいな目立つところでメイドやってるとメイドやってるってバレるかもしれないけど・・・一日なら大丈夫かな。）

「はい、大丈夫ですよ。一日だけですよね？」

「おお！いやあ、助かったわ。実はハルさんが抜けてから売上がちよっと落ちててな、明日は今の看板の女の子もないし、ハルさんが行って他の子にビシッとメイドってもんを見せつけてやってほしいねん。」

確かに自分が以前いた時、自分以外の女の子は少し萎縮しているように思えた。

自分が愛沢家のメイド喫茶、サク☆ニヤンに入ったのもそれがきっかけだ。

「いやあ、ありがとな。ハルさんは以前の看板やったから、きっと他の子も見習ってくれるはずやで。」

「えと、私がいたところと何も変わってないんですか？」

「ああ、今は他のとこと差別化を図るために『メイドお悩み相談』ってのをやってるみたいや。まあ内容はそのままやけど、あんま上手くいってないみたいなんや。」

メイドお悩み相談とは・・・まるで学校のカウンセラ

ーのような企画だ。

恐らく、上手くいってない原因はバイトの子がお客さんの相談を親身になって受けないからだろう。

「なるほど……。わかりました、では明日はこちらはお休みさせてもらいますね。」

「おおきに！秋葉のほう、頼んだで！」

「最近、友人が僕に冷たくて……。」。

「もしかして、なにかお友達の方に失礼なことを言ったのではないでしょうか？理由が分からないなら、思い切った聞いてみてはどうでしょう。」

「バスケットボール部なんですけど、なかなか上手くならなくて、辞めようか悩んでます……。」。

「バスケットを好きな気持ちがあれば、いずれと上手になるはずです。初心に帰って、バスケットを楽しんでみてください。」。

「親が勉強勉強ってうるさいんです……。僕は頑張ってるのに……。」。

「親御さんに、自分は頑張ってるってことを言ってみたらどうでしょう？それでも理解してくれないなら、やっぱり結果を出すのが一番ですよ。」

「ふう……」

休日でも夏休みなため、メイド喫茶を訪れる客は後を絶たなかった。
咲夜さんの言っていたお悩み相談も、時間が経つごとに私を指名する人が増えている。
毎回親身になって相談していると、流石に大変だ。

(でもまあ、結構やりがいのある仕事だな。お客さんが笑顔になって帰ってくれるのは嬉しいし。)

なんてことを思っていると、自分を呼ぶ声が聞こえた。

「ハルさんお願いしまーす！」

「はいはい、今行きまーす。」

裏の休憩所を出て店の中へ戻る。
指示されたテーブルに行くと、そこには自分のよく知った顔の男性がいた。

(せ、先輩!? な、なんでここに……)

自分の目の前にはアニメイトで働いているバイトの先輩が座っていた。

秋葉の中でも星の数ほどあるメイド喫茶で先輩がここを選び、なおかつ自分がたまたま勤めてるなんて、偶然にも程がある。

今はメガネもないし髪も下ろしているから、初見ではバレないだろうが……。

「えっと、きよ、今日は相談があつて来たんですけど……」

「は、はい、お悩み相談の方ですね。どうぞ、お気軽にお話ししてください。」

「え、えっと……でも、その……やっぱ恥ずかしい

っていうか・・・。」

「大丈夫ですよ。どんな相談でも笑いはしませんし、真剣にお答えさせていただきますから。」

「え、えっとそれじゃ・・・。あの、実は最近気になつてる女の子がいるんですけど・・・。」

「いいじゃないですか。その方は同年代ですか？」

「い、いや、年下です。それで、その子と付き合いたくて色々頑張ったんですけど、どうやらその子、男の子と同棲してるみたいで・・・。」

意外だ。

アニメ好きの先輩に気になっている女の子がいるなんて。男の子と同棲してるということは、要するに彼氏がいるということだろう。

なかなか難しい相談だが、お世話になっている自分の先輩だ、なんとか力になってあげたい気持ちもある。

「それは少し難しいですね・・・。お客様は、その女

の子が好きなんですか？」

「え?! い、いや・・・その・・・。」

先輩は顔を赤くしながら反応に困っている。

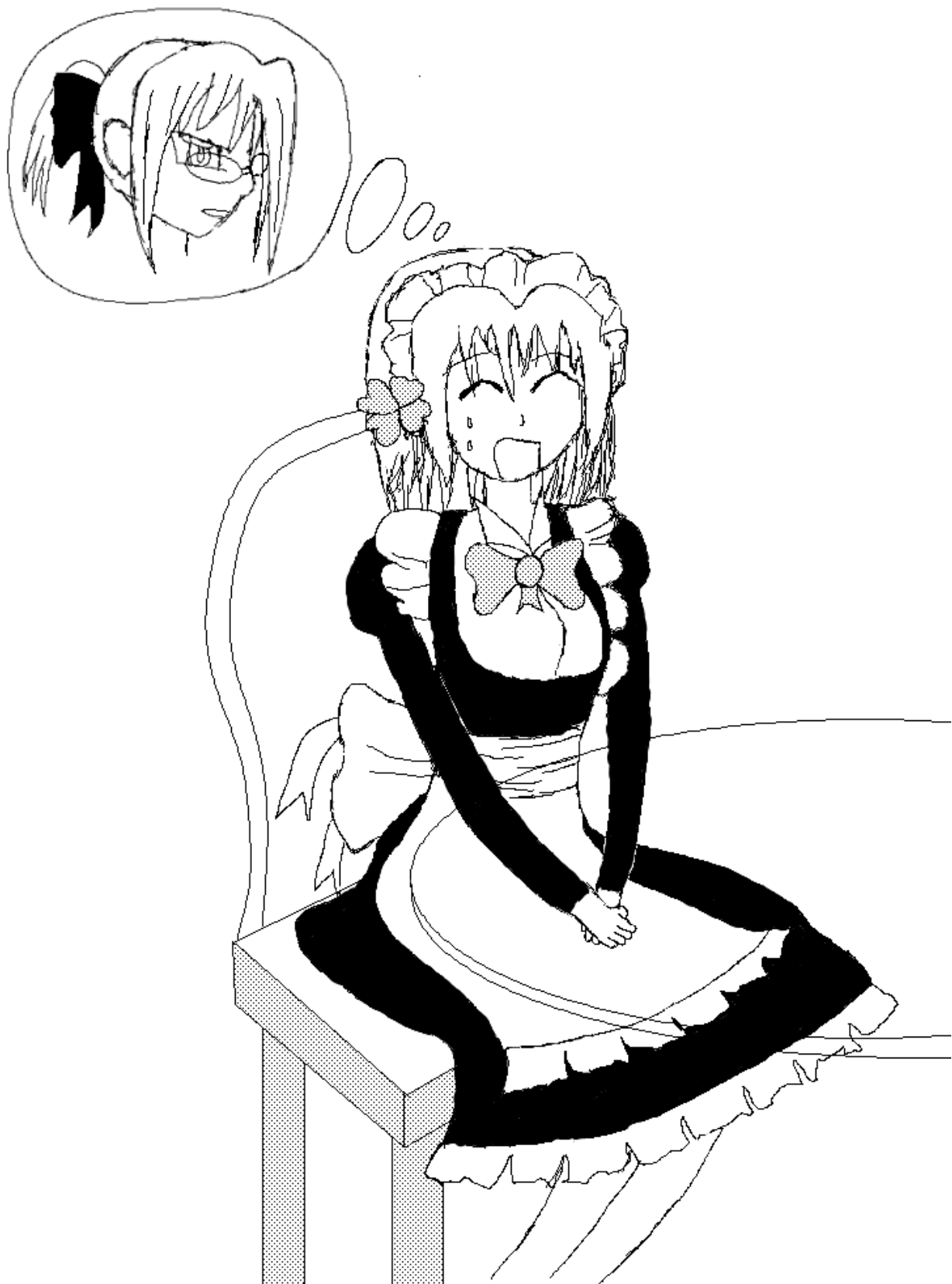
普段はこんなに慌てている先輩を見ることはないので、少し新鮮な気分だ。

「女の子と全く関わりが無かった僕に、初めて優しくしてくれた子で・・・。まだ諦められないっていうか・・・。」

「それなら、例え相手に彼氏ががいても積極的にアプローチしてみても如何でしょうか。自分の好意が伝われば相手の方も振り向いてくれるかもしれませんよ。」

「な、なるほど・・・。まだチャンスはあるかもしれないってことですね・・・。」

「はい! まだ諦めるには早いです、先輩!」



「……え、先輩？」

「……あ、いえ！すいません、間違えましたお客様！」

「ハルさーん、時間ですよー！」

危なかった。

話の勢いでつい先輩と呼んでしまったが、ここで相談の制限時間が来たようだ。

先輩は不思議そうな顔をしながらカウンターで料金を払い、店を出ていく。

バレなくてよかった。

(それにしても、先輩、上手くいくといいなあ……。)

翌日。

夜頃、アニメイトでの仕事が一段落し、裏の休憩室でコーヒーを飲んでいたら私に先輩が話しかけてきた。

電灯が切れかかっているのか、時折チカチカと光っている。

「あの、春風さん……ちよつと、いい？」

「あ、はい、仕事ですか？」

コーヒーを置いて立ち上がろうとすると先輩は慌てて手を横に振った。

「い、いや、違うよ。今日はもう上がりでいいって。」

「ああ、そうなんですか。お疲れ様でした……それ、どうしました？」

「いや、ちよつと聞きたいことあるんだけど……春風さんって、この他に何かバイトとか、やってる？」

「えっ!?!……い、いや、えーと……」



唐突な質問に私は少し驚いていた。

もしかして昨日の悩み相談の時に私だって気づいたのかもしれない。

とりあえずバレるのは困るので、誤魔化しておくことにした。

「……いや、何もやっていませんよ。ここだけです。」

「そう……。いや、昨日春風さんによく似た感じの人を見たから……。でもメガネかけてなかったし、違うよね。」

「そ、そうですね。私、いつもメガネかけてますから……。」

チカチカと電灯が光る。ペースが早くなってきた。

お世話になってている先輩に嘘はなるべく言いたくなかったが、仕方がない。

「……だよ。……でも、じゃあなんであの時先輩って……。」

先輩は不思議そうに首をかしげている。

やはりあの時呼び間違えたのは大きいミスだったようだ。このままだと気づかれてしまうかもしれないので、今日

はもう早く帰ることにする。

「じゃあ、先に失礼しますね……。」

「あ、待って、春風さん！」

その場から逃げるようにそそくさと出口の方へ向かった私を先輩が呼び止めた。

「……あの、もしよかったら、メールアドレス、教えてくれないかな。」

「……へ？メールアドレスですか？別に構いませんけど……いきなりどうしました？」

「い、いやあの……バイトの連絡とか出来ると便利かなって思っ……。」

「まあ、そうですね……。」

私は携帯を取り出し、先輩へ赤外線メールアドレスを送る。

先輩は後でメールするね、と言いつつ店のほうへ戻ってしまった。

いくら秋葉といえど、夜に駅から少し離れると人通りは少ない。

歩いていると、携帯が震えるのに気付いた。恐らくは先輩だろう。

『春風さん、いつもお仕事お疲れ様です。メールアドレス、登録お願いします。』

『登録しました。先輩こそ、お疲れ様です。そういえば、裏の電灯が切れかかっていたので、明日、私が交換しておきますね。』

メールを送信し、空を見上げると雲は無く月が綺麗に光っていた。

そういえば、昨日先輩から相談された女の子の件はどうなったのだろうか。先輩は何か行動したのだろうか。

(確か年下と言っていたけど……。まさか、ね……。)

ちようどよく満月だったので、先輩が上手くいくよう月に祈ることにした。

別に神頼みというわけではないが、祈っておいて損はないだろう。

(先輩が相手の方と上手くいきますように……。)

祈り終えたところで携帯がまた震えだした。

夜なのに風は無く、感じる暑さは昼と変わらない。この夏は暑くなりそうだ。

生命の弦

著者：torbion

とある病院のとある病室に、一人の少年と少女がいた。

「ハヤテ、バイオリン弾けましたわよね」

「弾けるけど…どうしたの、アーたん」

「決まっていますわ。暇つぶしです」

「は、はあ…」

そう言い、ハヤテと呼ばれる少年、綾崎ハヤテはバイオリンを弾き始める。アーたんと呼ばれる少女、天王州アテネは目をつむったまま聴いていた。

「ハヤテ、あなたの顔が見られたら、どれほど良かったことか…」

「アーたん、それは言わない約束でしょ」

アテネは病気により、視力を失い、聴力のみでの生活を強いられた。バイオリンを聴きたいといったのも、ただの暇つぶしでなく、ハヤテが近くにいることを感じていたかったのかもしれない。

「ハヤテ、そのまま聞いて」

「ん？なに、アーたん」

「ハヤテ、いままでありがとう。私はあなたといれて幸せだった。あなたがそばにいてくれてとても頼もしかった」

「アーたん、何を言って…」

「そのまま弾いてなさい、ハヤテ。私には時間は残されていない気がする。だから、念のため、サヨナラを言うておきたいの」

「アーたん、僕はアーたんと言ったたくないし、ずっと一緒にいる。だから、別れの言葉はもっと後に使って」

「…：…そうね、そうしますわ」

ハヤテはそのまま弾き続けた。アテネは微笑みながら聴いていた。

「プツン、プツン」

「あ、アーたん、ごめん、弦が切れちゃった。…：アーたん？」

アテネは幸せそうに微笑みながら、天を向いて動かなかった。

「ア―たん…ア―たん…ア―たん!!」

ハヤテの手から零れ落ちたバイオリンの弦を張り替え
ても、今までと同じ音を出すことはなかった。

～fin～

4月も終わりに近づき過ぎやすくなってきた今日この頃

「ハヤテー！」

練馬区の大きな屋敷から執事の名を呼ぶその声は今日も変わらない

「なんですか？お嬢様」

優しい声で主にこたえる女顔の執事は今日も変わらず

「うむ、新作のゲームを手に入れたのでな！しかも一般では手に入らない超貴重なゲームなのだぞ！」

ニコニコ顔でゲームパッケージを差し出す小さな主も変わらない

いつもと変わらない日常の中に・・・

少し非日常が紛れ込む

「すごいですね！どんなゲームなんですか？」

女顔の「女顔、女顔って・・・人が気にしてるのに・・・」
あ、ごめん

こほん、では改めて！

このお・・・じゃなかった貧相な顔の少年は綾崎ハヤテ17歳という年齢ではありながらこの大きなお屋敷の主、三千院ナギに使える立派な執事である
これでいい？

「女顔の次は貧相ですか・・・まあ、否定はしないので別にいいですけど・・・」

ちっ、めんどくさい男は嫌われるぞ（ぼそつ）

「何か言いました？」

いえ、なんでもありません

では気を取り直して、そのちっこい子がこのお屋敷の主で14歳という年齢ではありますが飛び級して白皇学院の高等部に通う、三千院ナギちゃんです！すっごく頭いいのですがひきこもりです

「うおい！なんだその説明の仕方は！！私は成長期なのだ！すぐに背は伸びるのだー！！」

あ、そっちに反応するのか・・・

それはさておき

「さておきな！」

あのお私にかまけると話が進まないんでちやちやとやっつけてくれませんか？

「なんだと!？」

「お嬢様、ここは素直に先に進んだ方がいい気がしま
す……」

「う、まあ、ハヤテがそういうなら……」

「それで、ホントにどんなゲームなんですか？」

「うむ、これはな。なんと！人氣アニメの世界をそのま
ま肌で感じる事ができるゲームなのだ！」

「それは面白そうですね……肌で感じるってどうい
うことなんですか？」

「あれをみるのだ!!」

ナギは後ろにある2つの豪華なベッドへハヤテを導く

「これは？」

ハヤテが疑問に思ったのはベッドの横に置いてある小さ
なテーブルでもそしてその上に置かれているPCでもな
く……

「これこそ！三千院家が総力をあげて作った世界最先端
のゲーム機。その名もナーヴギ「そこまです！お嬢
様！」

テーブルでPCに繋がれてる灰色のヘルメットを手にし
ながらナギに制止の声をかけた

「あの……これで、呪われたデスゲームクリアに挑戦

するんですか？」

「何を言っているのだ！これは三千院家の家紋をかけて
作ったのだぞ？安全第一！『これはゲームであって、遊
びではない』ということにはならない！私は純粹に遊び
たいだけだしな」

ナギがわかったようなわからないような理屈をこねてい
るが安全なのは確かなようだ

「早くそれをかぶってベッドに寝ろ！私は先に行つて
からな！」

ナギはパッケージをハヤテに押し当てると興奮しきった
顔でベッドに寝っ転がりPCの中にあらかじめセットし
てたのであろうすぐにヘルメットを被って別世界に飛ん
でしまった

「しょうがないですね」

ハヤテはため息をひとつですぐに気を取り直し、ベッド
に腰掛けてPCを開いた

押し当てられたパッケージをしばらく凝視していたがお
もむろにそれを開けセットしヘルメットを装着、ベッド
に横になる

しかし、ここからどうすればいいのかわからない
リンクスタートとでも叫べばいいのか？と思案している
と眠気など一切感じてなかった体だが急に意識が飛び視

界が真つ暗になる

主が待つ別世界へと少年執事も旅立って行った

さあ、ここまでがこの物語の出発点

次に眼を開けた瞬間いきなり上空から転落・・・なんてことはなくそこはほんのりと七色に光がもれる薄暗い部屋だった

ハヤテは咄嗟に主の姿を探したが自分以外誰もいない

「ここは・・・」

「ここはワールドガーデンです」

ハヤテが言葉を言う前に答えたのは上空から降ってくる機械的な声だった

「あなたはこれからたくさんの世界を飛び回る事になります。それにはこの世界のことをある程度知っておくことが必要なのです」

ここでは右も左もわからないので説明してくれるのは大いに助かる

機械的にしゃべり続ける声にとりあえずは従った方がよさそうだ

そう判断したハヤテはとりあえず終始無言で聞いた

「ここはたくさんさんの世界へとつながる出発の庭。様々な花が咲き乱れるようにこの庭には世界へとつながる扉があります。あなたはここからたくさんさんの世界を旅することになるでしょうが必ずこの庭へと生きて帰ってきてください。どの世界にも違った困難が立ちはだかるでしょう。しかし、その困難を乗り越えて全ての世界へ渡り歩いたものには素晴らしい褒美を授けましょう。どの世界にもない素晴らしいものを・・・」

そこで一旦声は止むがすぐに「さて、では手始めにどの世界へと飛びますか？」

との問いと共に目の前には無数の扉が現れた

「うーん。お嬢様はどの世界にいるんだろう・・・」

困ったことにナギからどの世界に行くかは全く聞いてない

聞く余裕もないくらい浮かれていたナギの顔を思い浮かべる

このシステムさんに聞いてもわからないんだろうなあ

ダメもとで聞いてみるかと口を開いた

「あの・・・僕より少し前にログインしたナギっていう女の子がいるはずなんですけどどの世界に行ったかとかわかんないですよね・・・？」

しばらく間があり帰ってこない返答にやはり駄目だったかとあきらめかけたが

「現在ログインしてるアカウント名を検索しましたところ1件ヒットしました。このアカウントがいる世界へと飛びますか？」

「はい！お願いします」

ほっと胸をなでおろすのと同時に自分の右斜め前にあった真っ赤な扉が重々しい音をたて開いた

「では、紅の世界への旅。存分にお楽しみください」

ゆっくりとそれに近づいて少し躊躇しながらもハヤテはその扉をくぐった

ボタンと扉が閉じるとワールドガーデンに差ししていた七色の光は消え、物音一つしない静けさが部屋を満たした

扉をくぐったハヤテはとりあえず周囲を確認する

特に変わりのな・・・くはないな

家が建ち並び、学校、商店街、とここまではいいしかし・・・

「紅い」

空が紅いのだ

いや、空だけじゃないその周りも全て紅い

無理やり塗りつぶされたような紅ではなく、世界が望んでその色を受け入れてるかのように・・・

紅の空間にしばらく動けないでいるとどこかから聞きなれた・・・しかし、明らかに違う声

「お前」

声のした方を振り返ると燃えるような赤々とした髪と眼、手には大太刀、そしてその背には大きな翼をもつ少女

「何してるの？早く!!」

「えっ？」

「早く私につかまって!!」

「え、え？」

なんなんだこの状況は・・・？

「えっと・・・君は？」

「私はシヤナ。今から一緒に紅世ぐぜの徒ともを・・・ああ、もういい」

「ちよ、え!!」

いきなりシヤナと名乗る少女に手を掴まれて

「うわあああああああ」

少女の体はふわりと舞い上がったかと思うとすぐに加速する

宙ぶらりんの姿勢で空気抵抗を体全体で受けながら少女に問う

「君はいつたい・・・」

「さつきも説明した。私はシヤナ。天壤てんじょうの劫火ごうかアラストールのフレイルムヘイズ」

「シヤナ、天壤、徒、紅い眼・・・あつ！」

ハヤテは気づいた

これは・・・「灼眼のシヤナ」

そう、これ灼眼のシヤナの世界なのだ

思い出してみればこのゲームはいろんなアニメを体験するものだしこの少女もどこかで見覚えがあると思った

となると・・・

「徒っていう敵を倒すのがこの世界のクリア条件・・・？」

「くりあ？何言ってるのかわからないけど徒を討滅することが私たちに与えられた使命よ」

「うむ、お主ももう少し自覚を持って」

「わっ！」

いきなり地の底から響くような低い声が聞こえた

「この声は・・・」

ハヤテは記憶の端から必死に知識を絞りだそうとするが

「アラストール。このペンダントはコキュートスっていう神器なの」

あっさり、シヤナが答えてくれた

ご丁寧に胸にぶら下がってるのペンダントを差しながら

「そ、そうなんですか・・・それで・・・その徒って言うのは強いんですか？」

ナギと同じくらいかそれよりも年下であろう少女に敬語を使うのはおかしかったかもしれないが彼女にはそれくらい威圧感があった

「強いのも弱いのもいる。大きい力を持った紅世の徒は王ともいうの。今回はたぶん徒の方。感じる力もそこまで大きくない」

ハヤテは少しほっとした

そうだよ、いきなりラスボス登場とかありえないし、まずは弱い奴からだよ

うんうん、と一人納得していると

「でも、気を抜かないで。相手の能力が分からない以上どんな危険があるかわからない」と釘を刺された

と釘を刺された

「ここね」

シヤナは広々とした河川敷を灼眼で確認するとふわりと地面に降り立った

「ここは・・・」

どおとおおとおおとおお

ハヤテが質問しようとした矢先、いきなり大音量の爆発音が響いた

「来た」

シヤナが大太刀を構える方向にいたのは……
トラだった

いや、トラとは少し違う

なぜか尻尾が竜っぽいいし、羽が生えている
なにより……

「でかい」

大きさが軽く10メートルはあろう大きなトラがこちらを
じっと見てニヤツと笑った

「ほほう、天壤の劫火、それに炎髪灼眼えんぱつしゃくがんとは」

まあ、トラがしゃべるのには驚きません

リアルでもいます
でも明らかに

「強そうですね」

車にひかれてもサメに食われそうになっても死なない強
靱な肉体をもつ執事でさえこれは……

「なっ!？」

驚きの声をあげたのはシヤナも同じだった

「なんで!？感じた気配はすごく小さかったはずなの
に……」

「えっ、このトラがそのてき……じゃなかった徒ともがらじやないんですか？」

するとハヤテの言葉に反応した大きなトラ（もどき）が

「おいおい。トラはないんじゃないか？俺は千変シュド
ナイ。まあ、ここで消えるやつに話してもあまり意味の
ない事かもしれない」

口調は平坦で穏やかだったが聞くだけで震えあがりそう
なくらいの圧力はある

「シュドナイは紅世の王。しかも、相当の強敵」

嘘だろ!？おい！いきなりラスボス登場しちゃったよ!!

「とりあえず協力者は呼んでおいたから後は……」

シヤナはその言葉を最後まで言い切る前に地面を蹴った

「できることをやる」

切っ先をシュドナイへと向け、大きく飛んだ

しばらくシヤナの応戦をみてみるとパターンがいくつ
かわかってきた

これなら、僕でも……

「よしっ」

自分に気合を入れると

ハヤテは大きく息を吸い、そして

「シヤナさん！スカート抑えて下さい！！」

「えっ!?」

シヤナはシュドナイの上を飛翔して攻撃の機会を狙っていたが咄嗟にミニスカの裾を抑えた

ハヤテは体全体に力を入れ、風を感じる・・・そして

「疾風のごとく!!」

ゲームの中でも使えるか不安だった奥義はなんなく使えた

「ぐおっ」

大きな巨体はその速さにはさすがに対応出来なかったらしくあっさり技は命中した・・・が

「ふはは、少しはやるようだな。少年」

技が命中してもシュドナイはほとんど無傷だった

「そんな・・・」

ハヤテは技の命中から数秒のタイムラグでシュドナイからの攻撃を避けることさえできない

大きな爪がハヤテに襲いかかろうとしたその時、

「ハヤテー!!」

聞きなれた少女の声が上空から聞こえた

「お嬢様!!」

咄嗟に叫んだハヤテはおもむろに右手を伸ばす

すると、そこには金髪ツインテールの少女が黄金の翼を

はためかせて手を必死に伸ばしていた

二人の距離はゼロになり、少女は飛翔する

シュドナイから十分な距離をとってから

「お嬢様！大丈夫ですか!!」

「それはこっちのセリフだ！むちゃなことをするな！心配したではないか!!」

少女、ナギは少し涙声でハヤテを怒鳴った

「すみません。お嬢様・・・」

「うむ、無事ならばまあ、良い」

「やっど、来たのね」

いつの間にか近くに来ていたシヤナは少し安心したような顔だ

「私だけではないぞ!!」

「えっ!!」

今度はシヤナもハヤテと一緒に驚く

「ほらっ」とナギは下を指差す

そこには・・・

「もう、待ちくたびれたわ」

ナギと同じツインテールだが髪は緋色をしている少女

二丁の拳銃を構えて、シュドナイへと向けている

その隣に

「そうね。まあ、魔法の詠唱時間が稼げたのは素直にありがたけれど・・・」

ピンクがかかったブロンドに鳶色の瞳を持つ少女
学生服の上からマントをはおい杖を掲げている
そして、

「ふん、こんな凶体ばっかでかいやつ。これで一撃くら
わせりゃあ気絶すること間違いなしだと思うけど」

栗色の髪に気の強そうな瞳が揺れる少女
木刀を構えて、戦闘準備万端って感じである

「これは？」
シヤナが質問すると

「別々の世界から来た戦闘に加担してくれる仲間達だ」
ナギは嬉しそうに答えた

「そう。別世界って言うのはよくわからないけど味方を
してくれるなら協力してあいつを討滅する」

シヤナも心なしか少し穏やかな口調になり
そして、

「一緒に行こう！」
力強くそう叫んだ

「二あつたりまえじゃない（だろ）！そのためにきたん
だから!!（ぞ）」

シヤナの掛け声に全員の声が重なった

そこからの戦闘はすさまじかった

爆発が起き、それが合図だったかのように二丁拳銃の発
砲音

その鋭い音を聞きながら木刀と大太刀で攻撃する
その素晴らしい連携プレイにハヤテは圧巻された

さつき知り合ったとは思えない
しかし、シュドナイもけた違いに強い

30分以上もの死闘が続き・・・

そして・・・

「はあはあ、だいぶ、戦ってるのにあいつ、どんだけ体
力あるのよ！」

緋色ツインテの少女がさういうと

「そうね・・・わたしももう精神力が・・・」

ピンクブロンドの少女も苦痛に顔を歪めてる

「あーもう、うっとおしい！さっさと倒れなさいよ！」

栗色の少女は木刀を地面に突き刺して、大トラを睨みつ
けた

「これだけ集めてもだめなのか？」

ナギはハヤテをぶら下げたまま絶句した

彼女もどこから取り出したのかシヤナとよく似た大きな太刀を持って攻撃していたのだ

「お嬢様・・・」

ちなみにハヤテもナギが接近した時にありったけの力を込めて殴る蹴るしていたがやはり傷一つつかなかった

「まだ！」

シヤナは一声あげると一人でシュドナイへと突っ込んでいく

「まあ、少々やるようだが・・・」

シュドナイは落ちついた声で

「所詮、寄せ集めたもの同士。まだ、戦力的には劣るまい」

建物一つを軽々となぎ倒せそうな尻尾をシヤナへと向けた

「今！」

シヤナは叫ぶ

「了解！」

どこからかあの少女たちではない声がシヤナの言葉に返

答した

そして

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおお」

いきなり、シュドナイが空間を揺らすような咆哮を上げ
そして川に向かって倒れた

川の水が跳ね上がり雨のようにハヤテ達の体を濡らして
いく

シュドナイの大きな巨体は光のカケラとなって散った
その光のカケラの中から白髪にサングラスをかけた中年

の男性が現れた
その男性は口元をふつと緩ませて

「まさかまだ援軍がいたとはな。計算外だった。今日は
ひとまず退散するとするか」

濁った紫色の炎に包まれ、そして消えた

シュドナイが降らせた雨がやむと川だった場所には巨大

なクレーターが残っていた

「ふう」

シヤナが一息吐くとそのままゆっくりと河川敷（だった
場所）に降り立つ

ナギもハヤテを連れてシヤナに続いた

30分ぶりに足の裏に感じる地面の感触はぼこぼこ&びしやびしやだったがなんとなく安心できた

「そういえば・・・」

ハヤテも一息ついてからさつき声がした方を向くと

「サイト！なんでここにいんのよ！！洗濯やってなさいって言ったでしょ！」

ピンクブロンドの少女に怒鳴られてあたふたしているのは・・・

「仕方ないだろ！好きな女が危険なところに行くって聞いて行かないやつは男じゃないぜ」

黒髪の少年だった

後ろにぼろっちい剣を携えているがなんとなく雰囲気

「できるな」と感じた

「な、なななあああ」

首まで髪と同じ色にして少女はしきりに少年をぼかぼか殴っていた

「このバカキンジ!! あんた来るのが遅すぎなのよ!!」

一方こっちのツインテさんは来ることに遅れてお怒り気味のようだ

「アリアの下にいち早く駆け付けたかったんだがあにく牙をむいた子猫ちゃんに邪魔されちゃってね。ごめんよ」

真っ赤になったツインテさんだったが真剣な目つきで

「キンジ。あんたまた」あの“キンジなのね？”といった何がトリガーなのかしら・・・

とトマト顔で悩んでいた

「あのおれ、呼ばれても何も出来なかったんだが・・・」

「あんたはわたしの回復役！ほら、お弁当！ちゃんと作ってきたんでしょ？だせ!!」

絶対あいつカタギのにんげんじゃねーよ！って目つきの少年にすごい罵倒を浴びせている栗色ちゃんはお弁当箱らしきものをひったくってる

「肉よ！肉が入ってなかったらもっかい作り直しかんね!!」

ギロツとにらんだその眼はあのシュドナイより何倍も怖かった

完全な肉食獣の目

こっちの方がトラなんじゃないだろうか？

そして

「悠二!!」

「シヤナ!」

こっちではシヤナが茶髪の手には大きな剣を持っている少年と話していた

「ごめん。来るのが遅れて・・・」

「いい。ちゃんと来てくれた」

少し、はにかんだ少年と少女

「修復するんだろ？手伝うよ」

「うん」

少年が手をさす出すと少女はぎゅうつとその手を握り、人差し指を紅の空へと向けた

すると、いままでぼこぼこしていた地面が元に戻り、川にも水がさわさわと流れている

「ふう」

シヤナが一息つくくと二人は手を（特にシヤナ）名残惜しそうに離れた

「さてっと」

シヤナが見渡すとそれを合図に総勢10人の少年少女がシヤナを見返した

「私たちと戦ってくれてありがとう。お前・・・あなたたちが来てくれて本当に助かった」

赤髪の少女はいつの間にか黒髪の少女になって、それと同時に紅の世界も青空が広がる世界に変わっていた

「そんなの。困った時はお互い様でしょ？あ、自己紹介がまだだったわね。私はルイズ。こいつはわたしの使い魔でサイトよ」

ピンクブロンドの少女・ルイズはサイトの襟首を引っ張りながら

「いてっ！何すんだよ！俺、平賀才人ってんだ。よろしく！」

ルイズに毒づきながらもサイトは名乗った

「私は神埼・H・アリアよ。武偵憲章第一条『仲間を信じ、仲間を助けよ』に従って行動しただけだから気にしないで。貴族は自分の手柄を人に自慢したりしないわ」

アリアが満足そうにそういうと

「あー俺は遠山キンジ。まあ、アリアのパートナーやってるんだ。よろしく」

さっきとは違い無愛想に言うキンジは少し目つきが違う

気がする

気のせいだろうか

「私は逢坂大河。まあ、最近この駄犬のせいでストレス溜まりまくりだったからいい息抜きになったわ」

にやりと笑いながら言う大河に

「俺がいつお前にストレスためるようなことしたんだよ！それに俺は駄犬じゃなくて高須竜児って名前がちやんとあるんだよ！」

大河に言い返すと

「あんたにそんな立派な名前必要ないじゃない」

とあっさり切り捨てられた

そして、

「私は三千院ナギだ。こっちはわたしの執事で・・・」綾崎ハヤテです」

ナギとハヤテも息びったりだ

「本当にありがとう。僕が駆け付けた時に知らない人たちばかりでびっくりしたけどみんながいたからシユドナイに勝てたんだ。僕は坂井悠二」

悠二がお礼を言いながら名乗ると

「私は炎髪灼眼の討ち手シヤナ」

シヤナもその長い称号と共に名乗る

全員が名乗り終えて・・・少しの間があり最初に口を開

いたのはルイズだった

「別世界ってあんまり考えたことなかったけど実は結構身近にあったのね」

そう感慨深げに言う

「ホントはあんまり来ちゃいけないものなんだろうけど」

アリアがそれに答える

「でも、」

大河が、

「うん」

サイトが、

「そうだね」

悠二が

「君（あなた）たちとあえて良かった（わ）よ」
みんなの声が重なった

そう叫んだ瞬間

ハヤテの視界はまた暗くなり・・・そして・・・

「あれっ!？」

一人、ノートをめくっていた少女はすときよんな声をあげた

「なんで、続きがないの?？」

少女は優しそうな青い目をぱちくりさせて

「ええ、おもしろそうだったのに!!」

不満そうな声で叫んだ

「おい!桃!何を叫んでるのだ!??」

その声が外部に漏れていたのか金髪をポニテールにしたスーツ姿の女性が入ってきた

「あ、ナギ姉!」

ナギをみるやいなや飛びつく少女は名前と同じような桃色の長髪を振り乱して直す気すらない

「うおお。またなのか?」

ナギは少女・桃の頭を手ぐしで直してやりながら苦笑する

「ナギ姉!ナギ姉!!あのね!おもしろい小説見つけたの!!」

「小説?ここはマンガばかりの倉庫だったんだが・・・小説なんておいてたか?ラノベ部屋は隣だし、間違えて

こっちに入れたのかもな」

ナギが少し思案していると

「あのね!これだよ!ナギ姉!」

差し込まれた小さな手が握っていたのは・・・

「うおおおおおおおおおおおおおおおい!!」

ナギが吠えた

その声にびっくりした桃は2、3歩後ずさった

「ど、どうしたの?」

「それ、どこから持ってきたのだ!?!」

「え?マンガ棚の一番端にあっただけ・・・ナギ姉のマンガ見たくて読んでたら・・・一個だけ小説なのがあった・・・それで読んだらすごく面白くて・・・でも続きなくてすごく残念で・・・」

最後の方はナギに怒られたと思ってしりすぼみになっていく

「ダメだった?」

「うっ」

少し涙目で見つめられたらもう何も言えない

「いや、別にダメじゃないぞ。ただ、マンガに飽きたからたまには小説なんかに挑戦してみようと思って結局辞めたやつだから・・・その、なんだ。読まれたのがあれだっただけで別に怒ってはないぞ!!」

その言葉に桃の顔はばあつと輝く

「良かった！ねえ、ナギ姉！これの続きって書いてないの？すつごく面白かった!!」

きらつきらの笑顔が眩しいくらいに輝くが

「すまん。そこからは書いてないんだ。結局小説よりマンガの方が私には向いていたみたいだからな」

ちよつと残念そうに目を伏せた

「そつかあ」

「桃ー!! 迎えに来たわよー!!」

「あ、ママー!!」

いつの間にいたのだろう

さつきナギがあけっぱなしにした扉に桃と同じ髪色をした女性が立っていた

「ヒナギク。結構早かったではないか」

「ええ。今日はそんなに大変な検査でもなかったし」

桃の頭をなでながらナギに返答するのは

”元“白皇学院生徒会長様、桂ヒナギクその人だった

「だが、気をつけないとだめだぞ。ハヤテも二人目だから大丈夫とは言っていたがあいつ、最近そわそわしてる

のがばればねなのだ」

しかし、今の名前は

「わかってるわ。桃も手伝ってくれるし、無理はしないから。まだそんなにおなかも大きくないし」

綾崎ヒナギク

それが彼女の今の名前だった

「それにしても、ごめんね。いつも桃を預かってもらって」

ヒナギクが少し申し訳なさそうに言う

「そんなこと気にするな。桃はいい子だし、この間なんかハヤテの手伝いして皿洗いしていたぞ」

笑いながら言うナギ

「桃！頑張ったよ!!」

桃もうれしそうにヒナギクに抱きつく

「そう、えらいわね、桃。もうすぐお姉ちゃんだもんね！」

「うん!!」

ナギはしばらくその二人のことを眺めていたが思い出したように

「そういえばハヤテには会ったのか？」

「ハヤテはまだ仕事中だし、今日は会わずに帰ろうかなって思ってるけど」

ヒナギクが言う

「じゃあ、もうハヤテもあがりでもいいから3人で帰れ」

「えっ？でも・・・」

「桃！パパに会いたい!!」

「ほら、桃もそう言ってることだしたまには3人で帰るのもいいだろ？育児休暇先に出しといてやるから」

ナギは桃の頭をなでるとハヤテを呼ぶために携帯を取り出した

お屋敷前に3人の親子が並び

「ありがとうございます。お嬢様」

ハヤテがお決まりの執事服で礼をい

「今日は本当にありがとうございます、ナギ」

ヒナギクも笑顔でお礼を言う

「ナギ姉また来るねー!!」

桃は再来宣言した

「またいつでも来い！新作のマンガを読ませてやる！」

ナギが頭をなでるともう一度桃はナギに抱きついた

家族3人が手をつないで帰っていく様子をじっと眺める

途中で桃が振り返り手を大きく振った

ナギも振り返す

3人の姿は夕日の中で小さくなり視界から消えた

お屋敷の前に一人残されたナギは

「まあ、こういう結末だが悪くはないな」

手には桃が見つけたノート

「私は不幸などとは思ってない。むしろ幸せだ」

紅に染まる空を見上げ

「お前たちはちゃんと結ばれて幸せになるのだぞ？」

青みがかったノートは夕日に照らされてほんのり赤みが

差していた

愛しい人と結ばれても、結ばれなくても

幸せを感じる事ができれば

その生き方は、人生は、きつと

素晴らしいものになるはずだから

ねえ、あなたは今、幸せですか？

マリアさんがお母さん役なら ハヤテは何役なんだ？

著者：羊田ペンタ

「お母さん役・・・もう必要なさそうですわね」

必要・・・ない？私が？なぜ？

ナギはなにをやっても途中でくじけてしまっ、それをなくさめるのは私。さっき言われた通り私がお母さん役でしたのに。いつのまに私の役はいらなくなっただんでしょう？でもそれは喜ばしいことのはずですよ？

でも私のナギにとつての役割は他にもあったはずですよ。・・・いえ、もうその役割も役ではなく本物がナギにはいますね。もうしつかりと自立できていたんですね。気がつきませんでした。というよりも自分で無意識に気付かないようにしていたのかもしれない。

もう諦めましょう。私がナギにとつての特別なような存在であることは。私は「ただのメイド」であると、そう思えばナギから直接いらなと言われても少し楽なきがします。まあそれすらもアパートの住人だけでなんとかなってしまうそうなんです。

◆
僕は縁側に座りながら考える。

「さよなら、かあ」

僕はどうしたかったんだろう？ルカさんとの思い出(?)が次々と浮かんでくる。自分でもよくわからないや。

「しよぼくれているな、少年！」

そんな時には、一撃必殺元氣百倍！
息の根コロリちゃんに、おまかせなの！」

「コロリちゃん・・・？」

なにがあったんだお嬢様。おかしい仮面をつけて登場してきた。

「安心する少年よ。見たところすごく元氣がないが、私の手にかかればお前もたちどころに元氣になるのだ！」
「元氣って・・・具体的にどんな方法で？」

「え？・・・モ、モノマネ？」

やっぱりノープランだよな、お嬢様だし。お嬢様が計画的に動いてたことなんてあったけ？・・・うん、やっぱりないな少なくとも僕の記憶の中には。

「なんて言うと思ったか？私だって少しは成長するのだ。ハヤテがそんな風になることぐらい予想はできる。ずっと一緒にいればお前の単純な性格もちよつとはわかるようにはなるのだ。」

え・・・？なんていうんだろう？文字通り絶句した。これはちよつとびつくり、いやちよつとどころではない。本当にびつくりだ。お嬢様は僕の知らないうちに成長していたのか。僕がいないほんの少しの間に。あれ？僕がいないほうが成長できるってことなの？なんか悲しいなあ。でも本当に成長したのかな？ちよつと試してみよう。

「それで結局何をしてくれるんですか？」

「えっ?!えっと・・・だから・・・モノマネ？」

やっぱり。なんだかんだ言ってお嬢様はお嬢様のままた

んだな。

「ええい、なんでも言わせるな！しょうがないからもうとっておきを出してやる！とっておきのモノマネってことではないんだからな！とっておきの秘策だ！」

「本当にプランはあったんですか!?そうは思っていますんでしたよ。」

「バカにするな私を！私の秘策というのはだな、コレなのだ！」

お嬢様が差し出したそれは、おそらくお嬢様が書いたサインと思われる色紙だった。その横にはクチャットとした人物が描かれている。ただそれは大部分がそうであろうという予想であって正直な感想は・・・

「らくがき・・・？」

と言ったところである。

「ちがあう！それは世界でたった一枚、三千院ナギが心を込めて描いたサインとお前の似顔絵だ！」

「似顔絵!?このクチャットとしたやつ僕なんですか？」

「クチャットとしたやつとはなんだクチャットとしたやつとは！結構似ているではないか!？」

ええくくくく？僕ってこんなにクチャットしてるのかな？さつきからずつとクチャつとばっかり言ってるな。

「・・・だがそれは、将来一兆部売る漫画家・三千院ナギがはじめて描いたサイン色紙・・・お前が言った通りその色紙はまだなんの価値も無いただの落書き。だが十年後それは、キラキラ光る宝石のようなものになるから、それまで大事にとっておけよ！」

そう言ってお嬢様は仮面をはずし微笑んでくれる。会話の途中からコロリちゃん設定がなくなってたのはこの際ツツコまないでおこう。

なんだかんだ今まで子どもだと思っていたお嬢様に励まされてしまった。僕は思った。幸せには色々な形があって、今はそれを選ぶことができるんだから、これでもいいんじゃないかと。

「はい、そうですよね。」

僕もやつと笑顔になれた気がした。



いつもより早い時間にマリアは起きる。メイドとしての立場ぐらいはつきりしておこうと、朝から働くつもりだ。しかし普段はまだ寝ている時間であり、こんなに早くからなにをすればいいのかも考えていなかったことを後悔する。とりあえず台所に向ってみる。

「あれ、おはようございますマリアさん。今日はお早いですね。」

ちよつとした絶望。ハヤテが自分より早起きなのは知っていたがこんな時間から働いているとは思っていなかった。わざわざ自分が働かなくても言いんだと言われた気がして。

「あ、ああ、おはようございますハヤテくん。ハヤテくんは普段からこの時間に起きて仕事をしているんですか？」

「今まではそうだったんですけど、それはルカさんのお

弁当を作ったりしていたので。その仕事がなくなった今はこんなに早くなくても大丈夫なんですけど目が覚めちやつて、何をしようか考えているところです。」

「あらそうなんですか？私も今日は早く目が覚めてしまつて何かやることがないかと考えているんですよ」

嘘を吐く。本当は自分から起きたのに。そんなちっぽけなことですら、なぜか隠そうとしてしまう。そしてまた自分をハヤテと比べる。ハヤテは誰かのためにこんなに一生涯命になれるのに、最近の自分はどうかだったのかと。

（ああ、私は最近だれにも相手にされなくて暇を持て余し、空気も読めずに構って構ってと行動していただけででしたね。そんなだから必要とされなくなってしまうんですか。）

そして結局なにもしないまま普段起きる時間になった。



今日は休日、起きる時間はいつもよりちよつと早いくらいだ。気になることがあるからな。

最近マリアの様子がおかしいとかんじているのだ。そう

思うのは私だけか？なんとというか、よそよそしい気がするのだ。他のやつらにも聞いてみるか。マリアは今買い物に行つてるし、普通に聞き回つても大丈夫だよな。

「おーい、ハムスター！最近マリアの様子がおかしいと思わないか？」

「うーん、私はよくわからなかったかな？でもナギちゃん。女の子の様子がおかしいときつてやっぱり恋しいかなんじやないかな？」

ダメだこいつ。

でもこいつの言うことにも一理あるのか？なぜならハムスターはいつも行動がおかしいから。まあその発想自体がおかしい気もするけど。

「でもマリアさんなら相手は誰なのかな？男の子と関わつてるイメージないからなあ。必然的にハヤテくん!?これはライバルが増えてしまうんじゃないかな!？」

おいおい、あんまりヒドいこと言つてやるなよ。それにこんな風になつちや使い物にならないな。放つて置いて次行こう、次！

ちようどそこにいるのはヒナギクか。よし聞いてみよう。

「おーい、ヒナギク！最近マリアの様子がおかしいと思わないか？」

「マリアさんの様子がおかしい？そうかしら、私はそうは思わないけど・・・」

「そうか。まあそれならそれが一番いいんだが」

「けど、だいたいこのアパートの住人のトラブルにはハヤテくんが関わってると思うのよ。だから本当に様子がおかしいならそれが原因かもしれないわね。」

「まあ善かれと思って大惨事になるのがハヤテだからな。それは充分ありそうな話だな。」

具体的な例を挙げられたわけではないがすごく納得できてしまった。それはそれでどうかとも思うのだが・・・

「そうなのよ。ハヤテくんなんて本当にいつもいつも変なタイミングで変なこと言うんだから全くもう」

あれ？ヒナギクもか？どんだけやらかしているのだ、ハヤテは。やっぱりマリアにもなんかやらかしているのかも

しれないな。まあそれはそれとしてこいつも放置しておこう。

お、カユラ発見。といってもマンガの話ばかりであてにはならなさそうだな。

「おーい、カユラ！最近マリアの様子がおかしいと思わないか？」

「ふむ、その様子がおかしいかはわからないが、そうなんだとしたらあれのことに對する怒りがまた再発してきたんじゃないか？」

あ、あれってなんなのだ？怒りが、とか言われると怖い。何が怖いってマリアが。

「ち、ちなみにあれとは・・・？」

「もちろん、同人誌の写真集のことだ！」

うぐっ！それを言われるとなんていうか罪悪感が……いやでもあのとき機嫌は戻ったはず、ていうかだいたいぶ前の話のはずだよな？だよな？でも原因が自分にあるかもしれないと思ったら怖くなったきた。なんでその可能性を一番に考えなかったのだ？私のせいであるのならやはり

私がなんとかしなければ！

「や、やはりそうなのか？」

「いや、心当たりがあるとすればそれ、ということだ。」

「あ、ああそうか。ありがとう・・・」

ま、まあまだそうと決まったわけじゃないんだ。次は千桜に聞いてみよう。最近では一番頼りになるしなにか分かるかもしれない。

「おーい、千桜！最近マリアの様子がおかしいと思わないか？」

「そうなのか？私はちょっとわからないなあ。他の人たちにも聞いてきたらどうだ？」

「聞いてきたよ！お前が最後だ。」

あとはハヤテとちっこいのしかいないよな？あいつらは役に立たなさそうだからな。

「んー、そうか。役にたてなくて悪かったな。」

「いや大丈夫だ、ありがとう。」

結局、たいしたことはわからなかったな。

「家族のような人の悩みの種にも気付けないなんて、ダメなお嬢様ですわね。」

「お前は！ちっこいの!!」

「名前ぐらいちゃんと呼んでほしいものですわ。アリスと呼んでくださって結構ですよ。」

「ああ悪いな、アリス。」

こんなちっこいのがマリアのことを理解しているとは思えないがな。話を聞いてやろうではないか。

「それで？お前は何か知っていると言うのだな？」

「だから私には名前が・・・まあいいでしょう。そうですわね、それに関する現場に居合わせていましたから。」

しかしこれについてはご自分で考え、理解することをオススメしますわ。」

(現場に居合わせたというより、トドメは私が刺してしまったのでしようけれど)

「何をえらそうに！本当はなにもわかってないんじゃないな

いのか？」

「あらあら、さすがにそこまで言われると・・・ではヒントぐらいさしあげましょうか。あなたが同人誌対決でどのようなものになりたかったのか、それをもう一度考えれば良いと思いますわ。」

ちっこいのはそう言い残して去っていった。私になりたかったもの？それがいったいなんだというのだ？今の私にはさっぱりだ。

◆

あの我儘なお嬢様も周りを気にかけてたりするなんて意外ですわ。しかし今回トドメを刺したのは私ですし、マリアさんにも申し訳ないのでちよつとは手を貸してさしあげましょうか。マリアさんはついさつき帰ってきましたわ。

「マリアさん、ちよつとよろしいですか？」

「あらアリスちゃんお腹でもすきましたか？」

質問に質問で返すとは失礼な。それに顔は笑っているの

に目が笑っていないとは、かなり重症な気がしますわ。事情を知っているとはいえここまで目に見えて変化がわかるほどなら、鋭い千桜さんの方ばかりと気付いているんでしょうね。千桜さんも気まずさを感じているんでしょう。だから知らないふりをしたのかも知れませんね。

「いえ、ちよつと真面目な話がしたいのですわ。よろしいですか？」

再度確認する。もうあんな話は嫌だと言われるかもしれないですから。

「はい、大丈夫ですよ。それで？要件はなんですか？」

口調にとげがある。ここは遠回しに言うよりも素直に言ったほうが伝わりそうですわね。

「マリアさん、あなたはあの日以来ずっと誰に対しても壁を作って接していましたわね？そのあり方を不思議に思ったお嬢様が心配してましたわよ？それでも元には戻らないおつもりなんですか？」

なんとなくだけでも、マリアさんはこれだけのセリフでは戻らないのだろうという気がしている。けれど私の手伝いはここまでですわね。

「私が皆さんに対して強化外骨格をつくっている？まさか。私は姉でもないんですよ？それにナギが心配だなんて。ナギにとって私はもうただのメイドなんですからそんなこともないでしょうね。それと元に戻るといいうか私はいつも通りですよ。」

最初は私にはよくわかりませんでしたが、後半は予想通りの答えでしたわ。あとはお嬢様本人にまかせるしかないでしょう。

「まあよろしいですわ。今の私の話をどう受け取るかはあなた次第ですから。失礼しましたわ。」

お嬢様とマリアさん。どのように終わらせてくれるんでしょうね。楽しみに待っていますわ。

ナギが私を心配している。正直うれいですが、今更そんなことはあまり望めませんね。私はメイドなんですから。

「マリアさん、ちょっといいですか？」

そう声を掛けてきたのは千桜さん。なにか家事でも頼みたいことがあるんでしょうか？

「最近のマリアさんは・・・ナギを家族と思ってないように見えますよ？」

そんなことはない！私はいっただってナギの家族でありたいと思っている！そう言いたかったのに言えなかった。

ナギが私を見捨てたと勝手に思い込んで、絶望して、自分から距離を置いていただけなんじゃないか？という疑問が湧いてきたからだ。

千桜さんはただこちらの返答を待っている。でも私は何も言えずその場からゆっくりと逃げてしまった。

「千桜。」

「えっ！」

その声に思わず振り返る。そこに居たのはナギだった。今の会話を聞かれていたのか？まあ会話と呼べるものではない気がしたが。

「ナギ・聞いていたのか？」

「ああ。私なりに考えて近いうちにマリアとの関係はハッキリさせたいと思った。だからお前も気を使わなくてもいいのだぞ？」

ナギもこの前のことで変わっているんだな。マリアさんはその変化を寂しく思ってるんだろうけど。

「そうか。そうだな。悪い方向にならないように頑張れよ。」

「善処するよ。」

そう言ったナギの目も笑ってはいないように見えたのは気のせいだろうか？



今、千桜に言った通り私は考えなければならぬのだ。マリアの悩みのたねとその解決策を。アリスは言った、ヒントは私になりたがったものはなにかだと。千桜は言った、マリアは私を家族と見ようとしなないと。これだけのヒントではぶっ飛んだ推測かもしれないが、マリアも特別ななにかになりたかったのだ。そしてその特別ななにかとは家族である、ということではないのだろうか。つまりマリアは私の家族であることを諦めてどうすればいいのかわからない状態なのではないか？なぜ諦めたか、そこも重要であるだろうが簡単に原因は思いついた。私の精神的な支えがマリア以外にもできてしまったことだろう。そしてそれに嫉妬しているということだな。嫉妬の対象は・・・ハヤテだろうか？一番可能性が高いのはそれだろうな。最近マリアのことを面倒と思いついていた面もあったのに、それに対してハヤテは取り合いになるほど構ってやっていたのだし。

さて、原因はわかった。これをどうやって解決させようか？・・・



私は解決策を練った。私としては後悔が残りそうな方法ではあるが、私にとって一番重要なのはマリアなのだ。それにあの日のハヤテの気分もあんなだったのだしハヤテにも悪い話ではないのだろう。辛いのは私だけだ。マリアとハヤテの二人を呼び話を始める。ここからは多分マリアとの勝負になる気がする。おそらくマリアは今とてつもなく卑屈になっているはずだ。それを通常に戻せるだけの励ましが必要になる。．．．やばい具体的に話す内容決めてなかった！流れに任せるしかないな。

「まずマリアに話がある。いいな？」

「．．．はい」

最初に勘違いを解いたほうがいいだろうか？

「最近マリアは勘違いをしていると思うのだ。私はマリアを家族だと思っているしお前にもそう思ってもらいたいんだ。わかるか？」

割とストレートな言葉を使ったと思う。あれ？これでダ

メだったらどう説得すればいいのだ？

「そんなことはわかっていますよ。話ってそれだけですか？」

目が笑っていない。まるつきり信じちゃいないな。どうするべきなのだ？

「．．．信じてないな、顔にそう書いてあるようなものだぞ？」

マリアはビクッと反応している。わかりきっていたことだがあたりだ。

「そ、そんなことは．．．」

「あるだろう！なぜ信じてくれないのだ！」

マリアの言葉を遮って続ける。まあなぜの部分はいわかっていけるのだがこれくらい言ったほうがちょうどいい。

「確かに最近は同人誌対決やらなんやらで忙しく、お前

と接する時間が少なかったかもしれない！だが私たちにはもつと長い付き合いがあっただろう！」

ここまでは順調そうだ。マリアの目も多少は変わってきた気がする。だがここから先は推測。これが外れていたら場の空気も冷めてしまうだろう。

「お前は私がマリアなしでも生きていけるほどの、マリアの代わりになるほどの人を手に入れたと思っっているよ。うだがそんなわけはないのだ！私にとってはマリアが一番重要なのだ！」

これでどうだ！外れていれば意味のわからない話だがきつとこれで大丈夫なはずだ！

「ナ、ナギ・・・！」

どうやらあたりのようだ。マリアが泣きくずれてくる。私はそれを受け止める。思ったよりも簡単に終わってくれた。

（私はなんてナギに対して失礼なことを考え、失礼な行動

をとっていたんでしよう。私はただのメイドになるべきだ、なんて。ナギは成長したっていつまでも私を家族と思ってくれているのに。もうナギよりも私のほうが子供なのかもしれないね）

これでマリアは今は大丈夫なのだろう。しかし、このようなことを再発させないためにはそれを示す行動が必要なのだ。

この状況を微笑んで見守っている、ハヤテ！次はお前を・・・楽にしてやろう・・・準備はできている・・・

「・・・ハヤテ、お前にも話があるんだ。わざわざ見守ってもらうために呼んだわけではない。」

「・・・！はい、なんでしょうかお嬢様？」

急に話を振られて驚いてはいたが普通に受け応えてくれた。今から言おうと思っていたことが言いにくくなってしかたない。

「単刀直入に言おう・・・お前はクビだ、ハヤテ。」

「……………え？」

呆然としている。それは当然だろう。いくらハヤテとはいえ急にクビと言われて驚かないはずがない。ついでにマリアも絶句していた。

「そんな！急に！いくらなんでも酷過ぎますわ！」

先に動きだしたのはマリアだった。怖いから落ち着いてほしい。いや落ち着けというのも無理だな。

「理由は二つある。一つは話の流れからわかるだろうが、私とマリアのためだ。マリアともっと一緒にいる時間を増やしたい。そんな私の我儘だと思ってくれていい。」

「私はそんなこと望んでませんわ！考え直してください！」

ハヤテは相変わらず動かない。そしてマリアが怖い。正直なところ今のは私の我儘だというのは建前だ。私はハヤテと一緒にいる時間が好きだからな。でもマリアのためというのは事実だ。そしてもう一つの理由……

「落ち着けマリア。理由はもう一つあるのだ。……ハヤテは……ルカと共に生きる人生を望んでいるはずだ……」

ここで私が悲しさを表に出してはいけない。そこでハヤテがようやく動きだす。

「ちよ、なに言ってるんですかお嬢様！」

顔を赤くして言う。ハッキリ言って私のさっきの言葉は推測でしかなかったが、今ので確信できた。

「はは、相変わらずハヤテは素直でわかりやすいな。やっぱりそうだったんだな。安心しろ、借金はなかったことにしてやるから。」

「そ、それは……じゃなくてなんでそんなことで」

「私は！ハヤテの幸せを願っているんだ！たしかに幸せにはいろいろな形があるかもしれない。けどな！その中にもやっぱり優劣はあるんだよ！」

ハヤテの言葉を遮り私は喋る、というより怒鳴っていた。いかん！余裕を保たなければハヤテの優しさが私に向いてしまうではないか！

「お前にとっての最大の幸せは好きな人と一緒にいることだろうか？だからいいんだよ。これから私とはいい友達としてよろしく頼むぞ？」

そう言って微笑んだ。つもりだ……。どんな顔をしているのかはわからないが。
ここでハヤテに気持ちを語らせなければいけない。

「ハヤテくん……」

そこへいきなり現れたのは他でもないルカだ。ハヤテとマリアは当然驚いている。私はもちろん驚いたりしない。なぜならこのために呼んでおいたからだ。

「ほら……。ルカに気持ちを伝えるところじゃないか？ハヤテ。」

絶対にここで泣いてはいけない。ハヤテに躊躇させてはいけない。勢いでハヤテに言わせなければいけない。そのほうがハヤテは幸せになるはずなのだ。

「お嬢様……。すみません……。ルカさん！僕もルカさんのことが好きです！付き合ってください！」

「……。ありがとう、ハヤテくん」

これでいい。ハヤテが放った言葉はとても素直だがいいものだったと思う。これでよかったのだ。ルカもハヤテも幸せそうな顔だ。よかったじゃないか。しかしルカはボソリと呟く。

「ごめんねナギ……」

おそらく聞こえたのは私だけだろう。私だけに聞こえるように言ったにちがいない。だが感謝されることはしたのだろうがなぜ謝罪なのだ！

「二人とも、幸せになれよ……」

その言葉で私は、二人を雰囲気だけで部屋から追い出した。

あの二人はきっと幸せになる。これがあの二人にとっての最高の形の幸せなんだろう。

ふふ、でもこれは、私にとってこの形はあまりにも……
いや変に考えるのはやめよう。

この結末が正しいのかはわからない。けどこれで悪くは
なかったんじゃないか、私がそう思えばそれで充分だ。

俯く私をマリアが慰めてくれる。ああ、マリアはやっぱり
必要だよ……

著者あとがき & メッセージ

【ロッキー・ラックーンさん】

こんにちは、ロッキー・ラックーンです。にゃんぱすー！

前回に続いて合同小説本に参加させて頂き、ありがとうございます。クイズ大会での合同本は今回が最後という事で、上位に入れてホツとしております。3連覇で終われなかったあたりがなんとも自分らしく締まらない感じがして苦笑いですが。

さて、SSについて。今回は新作枠での投稿で、久々に集中してテキストファイルとにらめっこする時間を作りました。意味不明なタイトルは終盤のアリスちゃんの寝言、『アリスは天王州アテネより友達が多い』のひらがな部分だけを繋げたものです。「はがない」のパクリと言えば早い話ですね。平日のチャットルームで「アリスちゃんと誰をメインで絡ませるか」というテーマでキャラを数字に割り当ててサイコロを振った所、アテネさんがお相手に決まりました。ドーせ6分の1だし来ないだろうと思って入れてた選択肢でした。立会ってくれた皆様が「ドーすんのこれ？」といった反応を見せてくれたのを今でも覚えてます。

内容について、マリアさんの件を。原作での「ナギのお母さん役はもう不必要」という展開に対して私自身が思う所をアリスちゃんに語ってもらいました。思えばあのシーンはいきなりマリアさんがショックを受けていたのに違和感を覚えたのに加え、次の話では同人誌執筆への急展開のせいで彼女へのフォローがされず、これまでの彼女の貢献に対してなんとも救いの無い事だと思っていました。なのでマリアさんに自信を取り戻してもらうべく、コメディだらけの話の中にねじ込みました。メインヒロイン（笑）じゅうななさい（笑）一人カラオケ（笑）と、尊厳を傷つけまくられてるマリアさん。居場所だけは失わせたくありません。

他、色々雑多に……。①お昼寝中のアリスちゃんの寝言は、Cutiesブルーレイ2巻についてるキャラソンの一部。

「す！」がポイントです。②ヒナへの恋愛指南の序盤はCuties5話のヒナへのアドバイスをもじっています。原作には無かった大好きなシーンです。③千桜さんからの人生相談も最初ネタ出しをしたんですが、咲夜との関係を説明させるので尺を取り過ぎたのでボツ。ゴメン千桜さん。

長くなってしまいました。ではでは最後に、読んで頂いた皆様、編集の双剣士殿、毎度毎度推敲作業を手伝ってくれるはるさく殿をはじめとした止まり木の皆様、ありがとうございました。またの機会にお会いしましょう。

【kull ゃん】

どうもこんにちは。またはこんばんわ。kullです。

おかげさまで二回目の掲載をさせてもらいます。今回は転載枠です。

(イラストがあった場合) イラストを描いてくれた人、大変感謝しています。ありがとうございました。

期間が短いので大変でした。まあアイデアが固まれば割とすぐ書きちゃうタイプなので、そこまで苦労はしませんでした。

今回もおなじみ千桜とモブの話です。

モブは二次創作に使いやすくいいキャラですね。

千桜が看板娘とかの設定をつけましたが、実際看板娘のポテンシャルはありそうです。

お悩み相談とかやってるメイドカフェあるのかな……。行ったことないので雰囲気とかは想像で書きました。指名とかもあるのかな……。

今の時代は、やっぱりメアドじゃなくてLINEなんですかね。

でも「LINEのID教えてください！」だとなんか変なので、普通にメアドにしました。

女の子にメールアドレスを聞くのは大変なので、モブは良く頑張ったと思います。

ちなみにあのあとは三往復くらいでメールを切られちゃいました。内容は想像におまかせします。ではまた。

【torbion さん】

はじめまして、小説執筆初の torbion です。

今回は短編という文量まで届かず、極度の緊張のなかで書きました。初のものにしては、少々重たいものですが、これから執筆していくにあたっての、良いきっかけとなったと思います。最後に、掲載させていただき、ありがとうございました。では。

【みっちよさん】

こんにちは！はじめましての方は始めまして！

また合同本に参加させていただけて光栄です！！

釘宮病のみっちよです！！

今回はちょっと趣味に走りすぎて若干カオスになっちゃいました(笑)

でも、クイズ大会の時「釘宮スキーのみっちよ」と言われたのでここはその釘宮スキーなどところを見せなければ！と奮闘しました(笑)

ハヤナギを期待した方はすみません。

私はどうしてもハヤヒナにしたかったのでナギちゃんがちょっとかわいそうにな感じになっちゃいましたが釘宮患者

さんにもそれ以外の人にも楽しめる作品になったら幸いです。
とりあえずこの作品に出た他作品を載せておきます。

ソードアート・オンライン（ゲーム機本体）

灼眼のシャナ（世界。キャラはシャナ、坂井悠二、アラストール、シュドナイ）

緋弾のアリア（神崎・H・アリア、遠山キンジ。子猫とは白雪のこと）

とらドラ（逢坂大河、高須竜児）

ゼロの使い魔（ルイズ、サイト）

お前をオタクにしてやるから俺をリア充にしてくれ！（名前だけ拝借。ヒナギクの子供、桃）
です！

気になる作品があったときはぜひご賞味して下さいね（笑）

そして最後になりますが、止まり木の皆様、ご愛読して下さいました！
皆様に天下無敵の幸運を！

この言葉と共にあとがきを締めさせていただきます。

【羊田。ペンタさん】

初めて合同本に参加させていただきました羊田。ペンタといいます。この作品はいかがでしたでしょうか？

日本語がおかしいところがあるかもしれないし、場面転換も多過ぎるし、誰の視点かもコロコロ変わったりして読みづらい、詳しい描写がなくていつなにが起こったかわかりづらいなど至らない点も多かったと思いますが、僕はこの話を書いてよかったですと思っています。

題名とアリスのセリフで始まること、あとルカとハヤテがくつつくことだけを最初に決めて残りはその場面で登場人物の心理を勝手に考えて、そういうほぼ勢いのみの作品ですから内容は自分好みのものとなりましたが、楽しんで

らえたなら光栄です。

ルカとハヤテがくつつくの納得ができなかった方、それは僕がルカ好きだからということ勘弁してほしいです(笑) また、僕はビンゴ大会でも合同本参加権をいただいたのでそちらのほうでは他作品クロスを書きたいと思っています。最後に、読んでくださった皆様、企画してくださった双剣士さん、ありがとうございます。

【ピーすけさん】

久しぶりのイラストでの参加になります。今回はマーカーで少しビビットな印象にしてみました。慣れてないので見た目の割には時間かかってます(笑)

でも、いいんちよかわいいいんちよ。元気なおにゃのこは良いですね。

私の拙い筆ではありますが、彼女の笑顔で少しでもこの本に彩りを添えられたなら幸いです。

【双剣士】

第1回合同本に引き続き、1年ぶりに挿絵枠で参加してみました。

サク☆ニヤンのメイド服は比較的簡単な部類かと思っていました。いざ描いてみると難しかったです。

あと、への字の目をした困り顔のハルさんを描こうとすると、ハヤテの顔とそっくりになったことには我ながら驚きました。原作の畑先生はどうやって描き分けているんでしょう、いやそもそも原作キャラの顔もハンコ・・・

ピンポン

おや、こんな夜中に誰だろう？ では皆さん、次回の合同本でお会いしましょう。

編集後記

昨年のGWから始めたクイズ大会&合同小説企画も今回で4回目、早いもので丸1年を数えました。クイズ大会のほうは常勝を誇っていたロッキー・ラックンさんからkuniさんへと政権交代を果たし、合同本初参加の方も新たに2名加わるという好ましい結果になりました。

第5回以降のクイズ大会を希望する声もありましたが、もう一度出題範囲を単行本1巻からに戻すと過去に出題した問題と被らないようにという意識が働いて筋の悪い悪問が多くなり、現在以上に上位メンバーが固定化される可能性が高いと考えますので、私が出題するクイズ大会という形式は第4回で終了とさせていただきます。

幸いなことに、クイズ大会の伝統はサーたん杯やワイ杯へと受け継がれ、合同本のほうはビンゴ大会をはじめとする新企画へと続いていきます。また別の視点からの合同本参加者募集企画というのも産声をあげるようです。ひなたのゆめを引き継いでから約1年半、管理人が旗を振らなくても積極的に企画や遊びの提案が出るようになったことをとても嬉しく思います。

一部の方からは企画の乱立により合同本の価値が下がるという懸念の声も聞こえていますが、別にお金儲けや箔付けのためにやってるわけじゃなし、トロフィーは沢山あっていいと思います。ひなたのゆめは小説道場でも同人ランキングサイトでもなく、ハヤテファンがみんな楽しんで交流サイトです。止まり木もそうでありたいと思っていますから。

奥付

書名…ひなゆめファンの止まり木・合同小説本 Vol.04

発行責任者…双剣士 (<http://soukenshi.net/mail/>)

発行日…2014年5月7日